

空

— Heart Sutra Ando/Shimada
Ver. Hamasaki Project —

2020年 ギャラリー島田（神戸）
エアークラブ、水性ペンキ 750×120

沢村澄子

さわむらしみずみち
昭和三十七年、大阪生まれ。新潟大学書道科卒。個展での作品発表は八十回を超え、野外インスタレーション、他ジャンルとのコラボレーションなど、書家として幅広い活動を展開。第29回京浜賞治賞奨励賞ほか受賞多数。二〇一九、二〇二〇年には本誌に連載「この人と書と」を執筆。

コトバにできないものを書く

「祈りの書」。こんな頁に掲載してただけるとは、ただ有難い。けれども、はたして自分の書がそれに見合うものかとなれば、正直よくわからない。もしかしたら、昨今わたしが書にする題材として選んできたものが、この企画に呼んでいただく要因となったのかもしれない。

二〇〇六年に書き始めた「いろは歌」は涅槃経の要約だともいわれている。二〇一六年には柳嶋妙見山法性寺（墨田区）の襖に「法華経」約



Reflection2011 (部分)

2011年 盛岡市中央公民館(盛岡)
不織布、水性ペンキ 180×5000

東日本大震災が起こった2011年3月11日から3月31日までの岩手日報から特に気になった見出しを拾って書き、盛岡市中央公民館庭園の苔上に50mにわたって伸べ広げた。死者数の記録、「非常事態」「がれきの街」「土葬始まる」「お水くれませんか」「ママ頑張り過ぎないで」など。

八万字を書き、そして、その後は、「般若心経」を書くことが日課となった。わたしという書き手以前に、この「経」が問題である。それぞれのものが長きにわたり、人々の祈りを蓄積してきたものだから、その「経」を書けば自ずと、そこに込み込んだ「祈り」が滲み出てくる可能性はある。

昨年、神戸・三宮のギャラリー島田での個展で、画廊の吹き抜けスペース上空に「般若心経」を掲げた。バックヤードにあった作品を梱包するためのプチプチ、エアークラップと、画廊の壁を修復するための白いペンキ。ハケ。スタッフが見守るなか、小一時間ほどで書き上げた。

書くことより上空に設置することの方が難しかったが、晴れた日には青空バックに白い文字が浮き上がり、曇れば何故か黒に見えて、雨の日にはエアークラップの凹凸に溜まる雨粒がキラキラと光り、それらはやがて「ザーッ、ザーッ」と声たてるように音を鳴らしながら、コンクリートの壁を伝い落ちてきた。

それをお客さんと一緒に見上げていて、昔、教室で、ノートの端っこに書き留めた小文を思い出したのだ。

「空が青いと」

空が青いとわたしは泣きたくなる

忘れていた小さな祈りが

この胸に帰ってくる

今回このお話をいただいたとき、ふと、この詩のカケラのようなものを書き作品にしてみようかと思いついた。けれど、次の瞬間、「できないことだ」と思い直す。

(言いたいことを) コトバにってしまったら、書にはできない。(書に)書く必要が、もうないからだ。逆に、決してコトバにならないものを、どうにもコトバにできないものだからこそ、わたしはそれを「書」にしたい。

「悲しい」と百回書いたからといって、「悲しみ」が伝わると思うな」と語る詩人がいたそう。ならば、「祈り」と書いたところで、「祈りを書いている」といったところで、伝わるその「祈り」でもないのだろう。

が、それでも、それもまた、何かの化身のように思われる。

(さむむらすみこ)